

JICAの現場から ④

「世界の屋根」と言われるパミール高原があるタジキスタン。標高7000mを超す険しい山々が連なる大自然が魅力で1991年にソ連から独立、2017年に日本との国交樹立25周年を迎えた。

◇

日本企業にとってタジキスタンはほぼ手つかずのフロンティアだ。たくさんの日本車が走り、日本製のスマートフォンが街中を席卷している。進出した日本企業はわずか1社。人々は高い技術を持つ日本企業の参入を心待ちにしている。

ソ連時代に基幹産業の綿花栽培に従事した大規模農場が独立後に解体、一斉に誕生した小規模農家の中から、近年、農畜産物加工に参入する農業経営者が増えている。生産高世界一を誇るドライ・アプリコットやハチミツなどが名物だ。経営の多様化により以前からの大型農機に加え、今後は稲作、小麦、野菜、果樹栽培に使う日本製の小型農機や、ジュース、ジャム、乳製品、毛織物などに使

う食品加工機械の需要増が予想され、日本企業の参入も大いに期待されている。

タジキスタンに進出した唯一の日本企業である宏輝システムズ（東京都千代田区）は、国際協力機構（JICA）の支援を活用して南部の乾燥地に自生する薬用植物、甘草（かんそう）の採集と栽培を手がける。製薬原料の調達先を多様化するべく、現地に一次加工工場を建設し、安定的な調達に成功。現地農家の生活向上にも貢献している。

タジキスタンは、国土の約93%を山岳地が占め、国内輸送の85%を道路に頼っている。老朽化した道路や橋梁の維持管理、落石・雪崩などの斜面防災に関する日本の技術への関心も高い。18年には日東建設（北海道雄武町）が、JICAの支援を活用してコンクリート・テスターの案件化調査に乗り出す。

ロシア語とタジク語が一般的なタジキスタンでは日本企業の活動には現地人材の活用が不可欠だ。

農畜産加工機械に商機

タジキスタン事務所長

たなべ ひでき
田邊 秀樹 氏

昨年、モスクワで開かれた独立国家共同体（CIS）日本語弁論大会でタジキスタン言語大学の学生が初優勝を飾った。その陰には日本語を教えるシニア海外ボランティアの活躍がある。

JICA留学生事業で来日し、修士号を取得した若手女性行政官が新設された観光開発委員会の副委員長（副大臣格）に抜てきされるなど、日本との架け橋となる優秀な人材が次々に育っている。

JICA事務所としても今後、農畜産加工業を中心にタジキスタンの産業・ビジネス振興につながる支援を強化していく方針だ。その際、タジキスタンの経済開発と日本企業の海外展開の双方に役立つものになるよう、進出を検討する日本企業に対する情報提供や後方支援を積極的に行う考えだ。



タジキスタン南部ハトロン州に開設した宏輝システムズの甘草加工工場

（隔週掲載）

【略歴】モスクワでロシア語を学び、99年JICAウズベキスタン事務所開設時の初代所員、シリア事務所次長、東・中央アジア部計画課長などを務める。17年1月から現職。シルクロード地域が専門。48歳。